馬場 秀行 氏

昭和53年4月～昭和58年3月　総務部副主幹（文化事業担当）
昭和62年4月～昭和63年3月　区長室長
昭和63年4月～平成　2年3月　総務部主幹
（財団法人世田谷区美術振興財団参事・
世田谷美術館副館長）

インタビュー日時　令和4年9月29日　13時30分～15時30分

[聞き手]（肩書はインタビューの時点）

せたがや自治政策研究所次長　箕田　幸人
せたがや自治政策研究所主任研究員　古賀　奈穂
せたがや自治政策研究所研究員　田中　陽子
せたがや自治政策研究所研究員　大石　奈実
せたがや自治政策研究所研究員　伊藤　大樹
せたがや自治政策研究所特別研究員　金澤　良太

はじめに

古賀　それではよろしくお願いします。

馬場　私の入庁当時は、何十年前になるの?昭和32年の6月1日というのは、忘れもしない。書いてある?

古賀　はい。経歴の一番下に。

馬場　昭和32年6月1日ということは、何年前になるの、これ。

箕田　65年ぐらい前。私も生まれていないです。私がオリンピックイヤーなので、昭和39年6月生まれなんですけれども。

馬場　昭和39年のさらに7年前ということ?人間、古くなったね。だから、忘れちゃうわけです。今も入ってくるときに、ちょっと言ったんだけれども、この前、車で来たときに、こっちへ淡島通りからさらに越して、コジマ電気のところを誘導されたのは覚えているんだけれども、あれ、どの道だっけ、淡島通りから来たまますっと来ちゃって、すぐ左に曲がって、わからなくなっちゃって、念のためと思って聞いてよかったです。ちゃんと教えてもらって。そのくらい、つい最近の記憶が全部飛んじゃうのね。昭和32年6月1日、この頃の記憶は残っています。

とにかくこの頃は、まだ多少なりとも戦後の、昭和20年8月15日の、このときは私は小学校1年生なんですけれども、ちょっと余分なことを言うと。今の目黒区の住まいを一歩も出たことがなかったんですけれども、たまたま小学校へ上がるということで手続きを終わったところで、あの当時だから、非常事態みたいなのがあったんでしょうね。目黒区立の小学校に上がる予定が、急きょ、東京の空襲があると。みなさんに言ってもわからないでしょうけれども、本当に空が真っ赤になるような空襲があるということがある程度言われていたので、じゃあというので、私はおふくろの里が八王子なんですけれども、八王子の市街からちょっと外れたところ、昭和天皇のお墓というか御陵、大正天皇陵と昭和天皇陵は一緒のところにあるんですよね、多摩御陵というところ。そこのすぐそばにおふくろの里があったので、そこへ急きょ疎開することになって、小学校1年生の1学期、8月まではそっちへ急きょ通うことになって、4月から夏休みまでそっちへ通った、そんなのが昭和20年の8月ですよね。

それから十何年たった昭和32年に区役所に入った。そのときは玉川の第4出張所というところで、当時だから環八がまだできていなくて、環八のすぐ裏だったんです。上野毛駅からすぐのところだったんですけれども、急きょオリンピックのために環八を造るというので、前の商店街とか何かは全部どかされたわけですよ。どかされたというか用地買収されたわけですよ。そうすると、区役所がその裏側にあったので、区役所の土地を商店街によこせということをやったんでしょうね、言葉は別にしてね。そんなことで、そこにあった出張所が移転させられて、私がその出張所を出たあとでしたけれども、私が初めて就職した思い出の出張所がなくなっちゃって、すぐそばですけれども、土地をほかに移転して、そこへ環八が開通した。そのような時期でした。ですから、もうすでにオリンピックの準備は始まっていたんです。ちょっと余分なことを言いました。

これは記憶に残したほうがいいのかは難しいところなんですけれども、その当時の私の初任給が、自分の記憶ではっきりわからないんだけれども、初任給ですよ、1か月いくらだと思う?7,600円で、とにかく8,000円もらえなかったという記憶。そのときに、4月に入ってすぐ所長がいて、庶務主任、生活主任と2つ、庶務係、生活係みたいのがあって、その庶務の主任から、4月に入ってすぐ1か月、仕事が終わった翌月の4月の給料だったか5月の給料だったか、そこまで細かくは覚えていないけれども、超勤手当というのを渡されたんですよ。1,500円もらった。これはびっくりしまして、だけれども、それがあることによって、いくらか生活も成り立っていたのかなというような時代です。とにかく初任給が大卒でも1万円いっていなかったんじゃないかな。私はたまたま高卒で入ったので、あれですけれども。

大学受験と都庁の試験の両方を受けておいたら、たまたま都庁の試験に受かっちゃって、当時

は23区じゃなくて都庁だったから。それで最初、ほかのところから来たんだけれども、蹴っ飛ばしていたら、世田谷区でどうですかと。あんまり長く蹴っ飛ばしてもいけないから、世田谷へ入って、おかげで今日、みなさんとまだこうやって御縁がつながってきたので、そのような時代でした。

若林の旧区役所庁舎（1955）
出典：世田谷Web写真館

建物もほとんど木造です。世田谷区役所もたしか焼けていますよ。いつ焼けたかは記憶にないんですけれども。私のいた庁舎ももちろん木造、出張所ですから、小さな建物。石炭ストーブがあったりなんかして、そんなストーブで暖房を取って、冷房はもちろんありません。扇風機。だから下手に扇風機をかけると、机の上が書類ですから全部飛んじゃうので、やたらにかけられないような状態で、冷房はもちろんなしです。入庁当時はそんなことで、その何年後かに、昭和39年にオリンピックがあったんですけれども、その頃になると、少しずつ大分景気も回復してきて、いろんな意味で給料もどんどん上がってきたような、何でこんなに上がるのかなと思うぐらいどんどん上がってきていました。そんな雰囲気のときでした。

私が入ったのは出張所ですから、玉川支所の玉川第4出張所ですよ。玉川支所のことをほとんどわからないし、そこで戸籍をやっているのと税務をやっているぐらいしかわからないんです。あとは土木ぐらいはあったのかな。ほかにどんな係があるのか、課があるのか何も知らない、とにかく出張所という一番の出先へ行きましたから。そのような状態です。でも、私はたまたま一番若いし、先輩も女性がほとんどでしたので、割合と重宝がられると同時に、まあまあにかわいがられて、そこでもあまり嫌な思いをしたことがなくて、毎日楽しい仕事はしていましたけれども。そんな話じゃないでしょう?

古賀　いや、ありがとうございます。入庁当時の世田谷区役所の雰囲気はどういう感じだったんでしょうか。

馬場　私は、今言ったように本庁じゃなかったんですね。あとは砧支所があって、玉川支所があって、玉川の出張所でしたので、本庁のことはほとんど何もわからない。私が本所のことをいくらか知ったのは、異動で玉川支所庶務へ昭和36年に行って、このときは統計調査係でしたけれども、このときは統計といいながら選挙管理委員会、庶務が上にありますので、昭和38年に玉川支所の庶務から、大体、統計と選挙というのは一緒に仕事をしていたんですよ。それで、そんなことがあって、統計とか選挙というのは支所だけではできないので、ほとんどがこっちの当時、本庁、本庁と言っていましたが、世田谷区役所の統計調査係は選挙管理委員会の事務局も兼ねていたはずです。ちょっと調べてみてください。

田中　横浜市もそうですよ。

馬場　そこで初めて区役所の本庁のメンバーというか、会ってみたら別にお互いどうってことなく、仲よく楽しく仕事をしていました。これもまた余分な話ですけれども、選挙をやると、割合といい手当がもらえたんです。その代わり、大変ですよ。それこそ徹夜に近い仕事をしていました。いろいろと仕事はしました。そんなことをやっていた。

そうやっているうちに、昭和40年に、合併じゃないけれども、支所の機能が大分縮小されて、当時の支所というのは、それまでは部長級、世田谷区役所に部長はいなかったんですよ。総務部長がいなかったんですけれども、玉川支所長と砧支所長は当時で2級廠といって、部長級が2人配置されていたんです。玉川支所が課長級になると同時に、区役所にも総務部長とか部長級が何人か置か

れるような時代でした。

その昭和40年の4月に私は人事へ来たんですけれども、このときは人事に来たけれども、玉川支所から1人、砧支所から1人、それぞれから1人ずつ本庁の人事係に来て、もちろんもともとの総務課の人事係というのはありましたから、そこへ私たちは行って、人事を結構長くやっていました。昭和40年から47年まで人事をやっていましたよね。

こんなことを言っていいのかどうかはあれなんですけれども、玉川第3出張所の次長と書いてありますけれども、次長職というのは当時なかったというか、実を言うと、いわゆる係長に昇任させる人が大分ダブついてきたという点です。大勢人がいて、どうしようかと。困ったと。ちょっとごめんなさい、自慢話的になって申し訳ないんですけれども、私は係長でも何でもないのに1人で一生懸命考えて、当時、24出張所がありましたから、24の出張所長が係長級でいるんですよ。そこに次長制をしこうと。それも係長級にしようと。自分1人で考えて、24の次長をつくりたいと。人事係長、総務課長に言った。じゃ、東京都が何て言うか。当時は東京都の人事と年中いろんな意味で、試験とか何かで、みんなただでさえ都と関係がありましたから、係長でもない、部長、課長でもないんですけれども、何でもないのに次長制で24人つくると。昇任者が随分はけていいねといって。

じゃ、おまえ1人でもいいからというので、私が行って折衝してきますと。というのは、都の人事のメンバーと昇給とか昇格とか、いろんなことで年中交流がありましたから、よく知っているから、いいよ、行ってくるよと言って、ひょいひょい行って、あっさり承認してくれましたね。ここで24人の次長級をつくりまして、そのとき、人事の係長はともかく人事課長というのがいないから、総務課長ですよね。総務課長と人事の私たちはあまり話が通じていないというか、あまり話さないで、人事は人事なりにどんどん人事の仕事ばかりやっていましたね。総務課長は議会対応だとかで大体忙しくて、そんなことで割合と若いときにそんな折衝をして、24人の枠をつくったこと、そんな記憶が、今ちょっと見て、ああ、そうかと。余分なことを言いましたけれども。

そこで次長で1度出たら昇任して、1年ちょっとですぐ戻されて、公害へ行って、公害のときに、これも余分な話です。公害対策の課長が都から昇任して来ていた課長でしたね。区の職員の何人かを集めて管理職試験の勉強会をやることになり、その下へ私も係長で行きましたから、馬場さん、あんたも試験を受ける気があるならやるかと。それで、やったらたまたま受かっちゃったというだけの話なんです。そこで公害から、2年たたないうちに試験に受かって、総合運動場の所長、初めてここが課長級の仕事でしたかね。

事ほどさように、割合と自由に、あまり人から言われないままに、好き勝手に、暴れたとか何かという意味じゃなくて、こつこつといい仕事をしていたのかなと。とにかく静かに自発的に何でもこつこつと、いつの間にか何かやっていたなという記憶、今思うと。また、それができるような雰囲気だったのかなと、そんな気がします。それが入ってから、少し余分なことも付け加えましたけれども、そんな感じの区役所の雰囲気というか。

古賀　まだ行け行けどんどんみたいな雰囲気ではなかったですか。

馬場　ではないです。

古賀　少し保守的というか。

馬場　保守的というか、どうしても、それはしようがないですよね。御存じのとおり、区役所ですから、そんなに無茶なことはできなかったです。

古賀　例えば世田谷から発信していこうとか、打ち出していこうみたいなのは。

馬場　という話はないですよね。

金澤　東京都との関係で言っていくと、東京都がやっぱり運営に委託することがあってということなんですよね。

馬場　そうです。公害対策にしても何にしても。東京都から管理職の試験に受かったのがみんなこっちへ、何人かは流れてきて、それを受け入れてくれとか。何年かいると都へ戻っていくとか、そういう交流はありましたよね。私なんかも東

京都の試験を受けて入っていますから、東京都の職員だったんですけれども。何年だったろう。それが全部、身分切替えというか、区に全部なっちゃって、都との交流もほとんどできなくなりますけれども。それまでは、今おっしゃったように、どうしても東京都に何でもお伺い立てて、1年に1回、みんなの昇給があると。その昇給を全部まとめて都へ一々出すんですかね。何千人かの昇給を全部都がオーケー、実質的にはほとんど持っていったものはそのまま通っちゃったということだと思いますけれども。

それから、今までもあるのかな、総務局に区政課なんていうのがありまして、今もあるのかな。

古賀　あります。

馬場　その区政課の職員とも私は随分仲よくしていたんですけれども、人事部の中でいうと、都の人事部職員なんていうのは結構エリートな、当時の試験の1番、2番で受かったような連中が来ていましたからね。そこへ来ると、しばらくすると、どこか部長へ出て、局長まで行くぐらいのルートがあったみたいです。ところが区政課なんかだと、そこまでのルートはなかったみたいで、割合とざっくばらんに話して、都の職員とも、そういう意味では仲よくというか、そんなに引け目も何も感じないで対等に話して、勤めていたような気もしますね。

金澤　そういう関係だと、やっぱり世田谷独自で何かをというよりは、東京都全体の中の一世田谷区役所。

馬場　ということでしたよね。でも、今言ったように、次長制みたいに、こっちから勝手に発案して、つくりたいと持っていくと、結果は反対もされないで、一係員が持っていったものに対して、別に文書を出せとも言われないで、24の次長をつくって、一遍に何人か昇格させた。

古賀　イメージが変わりました。もっと都の職員は抑圧的な感じだったのかなと。

馬場　それも抑圧的と感じる場合と、人間的に親しくなったおかげで抑圧でないというか、向こうからも、こっちからも、ざっくばらんに、その代わり、庁有車で、年中都庁の駐車場まで車で送ってもらって、行って帰ってくると、ほぼ半日がかりの仕事で、特に人事のとき、年中やっていました。人事のときに、区政課の職員とも、私が人事にいたときに付き合いというか、それほど私もいいかげんだったんでしょうね。あまり気にしなかったというのかな、対等に話して仕事をしていました。

古賀　今の都との関係とは大分異なっていたんだなと。

箕田　調べたときに、支所長が部長から課長級になったというのも、都から言われて、そういうふうにしたというようなことを言われてきたので、私もその辺が都からの指示で組織が決められていたのかなと思っていたんですが。

馬場　自治法の改正の中で何かあったのかね。区長公選制とかいろいろとありますから。それから、支所を持っている区というのは、23区の中でもそんなにないわけですよ。そんなこともあって、区にまだ部長級がいないときに、すでに部長級の地位と給料がもらえていたと。そこいらも東京都としては何かあったのか、そこいらは区政課の領域なので、私はぴんときていないです。当時、23区の中で支所があって、部長級のいた区というのは、調べてみないとわからないけれども、調べる必要があるかどうかはともかく、あまりなかったんじゃない?あったとしても、よくて大田が大きいから……。

箕田　大田があって、それで特別出張所に変えてしまった。課長が一番上で、特別出張所に変えていったという話は聞いています。

馬場　だから、世田谷と大田ぐらいしかなかったはずですよ。部長級の職員がいたのは、世田谷と大田に行くしかなかったのかな。それは定かではありません。私の記憶の中には全くありませんので、今、話の中でそうかなと思ったので、それはまさに研究所の仕事としてやってみてください。

箕田　私も話で聞いただけなので。

馬場　それが大事なんです。ちょっとした話が大事なんですよ。そこからいろんな糸口が開けてくるからということです。

古賀　最初に世田谷に配属が決まったときという

のは、どんな気持ちだったのでしょうか。

馬場　私は住まいが目黒でしたので、東京都の試験に受かって、東京都から呼出しがありました。最初に来たのが水道局だったんです。3か月か半年だけ水道のメーターの検針員をやってもらって、それから内勤になると、そのような通知がちょっとあったので、9月、暑くなりかけていて、検針員、嫌だなといって、それでそこは断っちゃった。4月か。4月に切っちゃった。外回りは嫌だなといって。自分としては、もうちょっと勉強もしたいしなんていって。外回りはあまり好きじゃない。そうしたら、世田谷が次に来たので、あまり断り続けてもいけないし、隣の区というか、地理的に世田谷なら通えそうだなということで、じゃ、世田谷へ行ってみようと。世田谷へ来たのが、今日みなさんと会って、こういうつながりができて、よかったとか悪かったとかは別にして、今思えば、自分なりにはよかったなというふうには思っていますけれども。ただ単純にそれだけです、理由としては。それと、当時の雰囲気でいくと、役所に入ると、比較的、仕事が終わってから夜に学校に行きやすいような話もちらっと聞いていましたので、それも併せて、その翌年から学校へも行って、そんな感じで区役所に。

金澤　当時からも割と成城とか奥沢辺りの海軍村とか高級住宅地と言われるものが世田谷はすでにあったかと思うんですけれども、今みたいないわゆる世田谷ブランドみたいなところというのは、30年代前半ぐらいにはどうだったんですか。

馬場　入った人間としては、あまりそういう色は感じなかったです。あとから聞いてみると、玉川というのは独立心の強い地域だった。玉川村、いうなれば世田谷区じゃなくて独立しようと。狛江が外れていたり、あんな調子で。それはあとから聞いた話ではありますけれども、私が入ったときは、もうそういう話はほとんどないし、我々は玉川村だよなという住民もほとんどいなかったです。私としては、会った覚えなしです。あまり強くは出ていませんでした。何人かはいたと思いますけれども。逆に言うと、玉川があって、砧があって、砧というのか烏山のほう、いろいろと地域性はあったかもわかりませんけれども、一職員としては、仕事をやっていて、そういう地域性を感じたことは一度もなかったんですね。

だから、玉川の出張所から支所の庶務へ行って、庶務から人事へ来たときも、砧支所の職員ともすぐ打ち解けて、本所の職員とも、私の前にすでに玉川から1人、人事係の係長の次席の人が1人いましたしね。雰囲気としては、本所とか支所とか、玉川とか砧という意識はほとんどなかったです。ただ、あったとすれば、交流、親善のための玉川、砧、本所の3所の対抗試合みたいな、スポーツのイベントみたいなのをやっていたときには、そこいらは多少ありました。本所には負けんなとか、砧には負けんな、それはありましたけれども、それは試合までで、終わると一緒に飲みに行っちゃっていますからね。何にも壁はないし、むしろ仲よかった。逆に言うと、世田谷という地域性からくるあれなのか、職員の資質なのか、雰囲気は非常に大らかな感じというか、そんな気がしますね、今思うと。

それから、地域も農村型とまではいかないまでも、多少、郊外型の緑の多いところで、とげとげしさが全くと言っていいぐらいないようなところでした。ただ、何かあったときに、玉川、砧と出たこともなかったとは言えませんけれども、それはほんの僅か、それも地域の人同士の話で、区役所の職員の中には、そういう地域性は全くない。半分かもっとあれじゃない?世田谷区の在住じゃなくて、砧辺りでいくと、町田辺りから通っている人が3割から4割いたんじゃないかしらね。みんな小田急線の沿線に勤めたいということで、住んでいる人が向こうがいいと。むしろ電車の、そういう通勤の関係とか、それから、何も世田谷区の在住者だけを採用するという話でもないしね。当時、試験そのものが東京都全域から募集、都の職員ですから、そんなこともあったし。あまり地域性を気にしたこと、地域性というか世田谷区の中でそれを感じたことはなく、非常に和やかでした。今もって砧から来た人とは、私が結婚式で司会をしてみたり、家族ぐるみの付き合いをしている。仲のいい話でありまして、何もそういうもの

はない。だから、世田谷区の職員というのは非常に温厚なというか和やかで、いい雰囲気の中で仕事はしていました。

世田谷区基本構想・基本計画

古賀　ありがとうございます。今お話しいただいた総合運動場の管理事務所長でいらっしゃったときに、ちょうど区長公選制が復活して、大場区長が選出されたというところで、このあたりで劇的な変化があったかなと思います。そこはまさに、このあと、昭和51年の4月に企画部のほうに異動されて、そのあたりの変化とかを伺えればと思いまして。今までインタビューさせていただいたんですけれども、ここがかなり大きなインパクトがあって、劇的に区役所が変化したというお話も聞いておりますので、肌で感じたところとか、そのあたりも含めて話をいただきたいと思います。

馬場　私自身はそれほど大きく肌で感じているわけではなかったんですけれども、たまたま人事に長いこといましたよね。7年近くいたと。ということは、こんなことを言うとあれですけれども、区役所の中の総務の中枢というか、全体を見ることのできるところにいた。それから、人の流れというか配置から、どういう人がどういうところにいるみたいなことは全部、7年もやっていますと、いろいろと承知をしていました。それから、総合運動場の所長になったときに、こんなことを言うとあれですけれども、どうせいられても1年だろうと思ったら、見事1年で戻されちゃったというか、やっぱり人事を長くやっていたというのもあったのかもわかりません。企画へ来て、50年で区長が公選になって、いよいよ基本構想・基本計画をつくらなきゃいけない。ついては、どんな人間を総務、企画、そこいらに集めてやっていこうかというようなことだったと思いますけれども、そういうところで、私なんかは人事にいたということで、総務部長とか企画部長あたりが多少なりとも私のことを知っていたのか何かわかりませんけれども、早々とこっちへ戻されちゃったみたいなところはありましたね。

私は区の政策立案みたいな仕事をやったことは実はないんですよ。自分もあまり得意じゃない。参ったなとは思いませんでしたけれども、大変なところへ来ちゃったなと。そんなことで、こっちへ来たら、区長がこれをつくるに当たって、まず、どういうところからやっていこうと考えたのかなと思うと、今思いますと、当時、議会で議会史の編さんだったのかな、何かで大学の教授、成蹊大だっけ、佐藤竺先生[1]という日本の中でもと言ってもいいくらい有名な地方自治の権威ですよね。この先生がたしか議会史の編さんで、何で世田谷区と関わりがあったのかは私は知らないんですけれども、議会のほうにたしか関わっていたのかな。ちょっと調べてみてくれますか、そこいらがよくわからないところなんですけれども。区議会事務局、議会史はない?

箕田　議会史はここにないんですよね。

古賀　大場区長が呼ばれてこられたみたいなんですけれども。

馬場　大場区長が連れてきたのか、誰かが進言して、大場区長が事務局長、当時の区議会事務局長は、実を言うと、こんなことを言っていいのかな、部長級の中でも少し特異な存在で、なぜかというと、45人の区議会議員を割合とうまくいっていた。とにかく議員さんをうまく、ほとんどが保守系でしょう。そのあとに出てきた革新系のとんでもない人とか、そういう人はあまりいなくて、そこいらも含めて、そういったところから来たのか、あるいは1人で、この記録で、私の名前の中でのちに総務部長をやった田中勇輔さんが、そっちのほうの勉強をしていたのか議会史の編さんか何かで、割合とそういう学術的なことが得意だったのが議会の事務局長の下にいて、その人が何かあったのかな、佐藤竺さん先生を良く存じ上げていた。

区長が当選して、これから、こういうものをつくるとき、基本構想・基本計画をつくるとき、どうしたらいいだろうと。多分、田中勇輔さんを、区長としてはすごく信頼していた。言うなれば腹心の部下で、何でも言える。彼と相談したのか何かわかりませんが、とにかく私の見ているところ

1　東京大学名誉教授

では、非常に田中勇輔さんの力というか、力じゃないんだな、調整力というか、佐藤竺さんの知恵をお借りしながら進めていく。区長公選になったこれからの地方自治体の在り方はどうなのかというところを学術的な面とまた別の、よく言う区長としての文化の面と両方なんですけれども、まず学術的な面を進めていくにはどうしようというときに、佐藤竺さんの力を借りて、世田谷区の基本構想委員会の委員の選定をしようということで、東大の教授2人と東京工大の先生、それから、まだ若手で、ばりばりのこれから伸びていくよという先生で、東京農業大学の進士五十八先生[2]、今思うと、すごいメンバー。だって、今、進士先生というのはすごいでしょう。日笠先生は、川上秀光先生[3]と同じ東京大学でもちょっと先輩なんですけれども、非常に温厚な先生で、川上先生でしょう。正田彬さんというとあれですけれども、正田美智子さんの関係ですよ。上皇后のどこか遠い親戚ですよ。それから、鈴木忠義さん[4]が東京工業大学でしょう。貞賀さんは図書館長になっていますけれども、この人も結構なあれじゃない?昔の皇族か何かじゃないかな。石塚一信さんは、商連です。それで大場信邦さんでしょう。この方は町連の会長です。言うならば、この中で佐藤竺さんであり、日笠先生であり、それから進士先生はどこだっけ。ここにはまだいないかな。鈴木忠義さんがいるんだから、進士さんがいてもいいんだけれども。区議会議員のところは全然関係ないものね。工業会も関係ないでしょう。柳田さんもいいや。あれ、進士さんはどうしてないんだろう、ここに。

田中　「地域行政のあゆみ」[5]には、たしか名前があった気がするから……。

馬場　日笠先生と川上先生のところでは、さっきちょっと出た田中勇輔さんと2人で、佐藤竺先生からの指示というか、頼みに行くといいよと言われて、特にこっちは都市計画なので、日笠先生は何だったかな、忘れちゃった。やっぱり都市計画だったかな。東大の教授なので、世田谷区の一職員がどういう名刺を持って、肩書で行ったら会ってくれるのかな。とにかく雲の上のさらにその上みたいな感じで、当時としては初めて。とにかく東京大学へ行くわけですから、ただ電話1本かけておいて、今からお邪魔したいんですけれども、日程を取って、面識も何もないんですよ。

古賀　馬場さんが挨拶に行かれたのですか。

馬場　だから、私と田中勇輔さんと2人で行ったわけですよ。

田中　田中勇輔さんも区の職員なんですか。

馬場　もちろん区の職員です。最後は総務部長をやって、助役になれと言われたけれども、政治が大嫌いで、蹴っ飛ばして川場村へ行っちゃいました。川場村で余生を送っています。とにかく、この人も欲のない人で。どっちかといえば学究術肌というか、こつこつ字を書いて、計画をつくっているほうが好きだった。それはともかく、そういう人と2人で日笠先生、川上先生の研究室へ行って、いろいろと言われました、実を言うと。特に川上先生なんかからは。あまりここで言えないような要求というか話もありましたけれども、最後は来てくれましたね。余分な話だけれども、川上先生とは、非常に難しい先生だったんですけれども、最後は審議会が終わったあと、馬場さん、今日、暇かい。帰り、俺のうち寄っていけよと、ご自宅で一杯飲まされたことがあって、余分な話。先生との付き合いも、私もまあまあにある。

それから、正田さんのところは私は行った覚えがない。鈴木忠義さん、東京工業大学の教授のところ、これは私一人で行きました。それから、進士五十八さんのところも私一人で、何かよく行きましたね。とにかく行けと言われていたな。今じゃ絶対に行かれないようなところへ平気で、平気でもないけれども、震えながら行っていました。

古賀　メンバーというのはどういう形で選んだのでしょうか。

馬場　学経のほうは全部と言っていいくらい佐藤竺さんだったと思います。

古賀　その方をということで大場区長が指名されたんでしょうか。

馬場　この人の著作とか意見とか、いろんなものを佐藤竺さんがみんな把握していますから、多分、自分の研究室に都市計画の本、地方自治の本

2　東京農業大学名誉教授
3　東京大学名誉教授
4　東京大学名誉教授
5　世田谷区地域調整室（1993）「世田谷まちづくりの記録4　せたがや――地域行政のあゆみ」

があったみたいでした。とにかく大場区長がこの佐藤竺さんの意見をうまく取り入れたというか聞きながら、学究をうまく使っていたというか、お願いしていた。その人たちが非常にいいメンバーだったと。何でここに進士五十八さんがいないかな。私は行ったんですけれども。

田中　当時の世田谷区都市美委員会じゃないですか。都市美委員会のメンバーでいらっしゃるし、ちょうどその頃、それらしい感じです。

馬場　結局は、佐藤竺さんじゃなくて鈴木忠義先生が進士さんを推薦してくれたのかな。それで行って、頼んで、当時はまだ助教授にもなっていなかったんじゃないかな。そんな感じの人ですけれども、発表している論文だか何かで成果があったのか、何かが非常にいいし、しかも、普通はやっぱり大体が見ていると東大系とか官立大学系なんですけれども、あの先生は農大出なんです。これはいい先生だよということで。余分なことを言ったんですけれども、そんなことで、ここいらの日笠先生、川上先生、もちろん佐藤先生なんですけれども、それから鈴木忠義先生、こんなメンバーを。あとは議員さんとか、当たり前に、秋山肇さんだって、そうだよね。この人も最後はたしか都議会から国会議員までやったのかな。そんなことで、大場区長としては、とにかく自分たちでいくらいいのをつくっても箔もつかない。多分そう思ったんでしょうし、いいものをつくりたいということで、学究をうまくお願いして来てもらってと、そういうところです。

古賀　これ（世田谷区基本構想・基本計画）をつくるときなんですけれども、前の計画を否定するというんですか、うまく引き継いでこれをつくろうとなさったのか、それとも完全にリセットして、新しい世田谷の計画をつくろうということだったのでしょうか。

馬場　これは何年にできたっけ。

古賀　昭和44年、そのくらい。

馬場　こっちはあまり引きずっていないはずです。そこで、今言った学識経験者ごとというか大学の教授を、佐藤竺さんの意向をうまく酌みながら、むしろ、あまりこれについては。

古賀　こっちは結構都市計画的な内容で、ハードの感じの内容で、こちらになったら急にヒューマン都市と言ったり、こっちも一応住民本位と言っているんですけれども、そこをすごく前面に押し出している感じがして、そこの雰囲気というのはやっぱり大場区長が大事にされていたイメージなんでしょうね。

馬場　大事でしょうね。私もそう思います。

古賀　最初から、「見直す」と言っているんですよ。最初の3行でもう否定している。

馬場　それは多分、佐藤竺さんを含めた学究ごとの思いを、大場区長の意向を酌みつつ、こういうところにも如実に出ているんじゃないかなと。だから、ハードももちろんありますけれども、ソフト面というか。

箕田　使う人たちとか住む人たちがどうかという切り口になっていて、こっちも建物の種類で計画が。

馬場　どうしても計画はそのほうがつくりやすいというか、目に見えて実績として表にというか、みんなに見せたい、残したいというところはあったんだろうと思いますよ、当時はね。そんな感じが私としてはするんです。ただ、これをつくっている途中で私はここからいなくなっちゃっているんです。

古賀　昭和53年のときですね。

馬場　そうでしょう。とにかく俺が区長としては「文化」がやりたいんだよと、担当をほかに、おまえがやれという調子で、いい迷惑というか、でもやってみたら楽しかったというか、それは別にして、とにかく区の職員の中で、文化とかイベントとかソフト面を担当した職員がただの一人と言っていいくらいいなかった。いなかったんじゃないですよ。行事がなかった、やったことがなかった、やることがなかった、やる必要もなかった。どっちかというとハードのほうがみなさんもやりやすいし、それから、よく言うあれですよ。インフラの整備だとか福祉とか教育とかと言われるすぐわかる地方自治の3本柱みたいなものは、やりやすいというか、誰もが目につけるし、わかるし、また、それをやっていくことによって区民の信頼も

得られることも確かですよね。

古賀　今、世田谷区議会史、佐藤竺先生が執筆者のところに入っていましたね（資料を見ながら）。

馬場　執筆者は佐藤竺先生だけ?

古賀　と法政大の阿利……。

馬場　法政大?

古賀　國學院大の高木鉦作先生[6]。

工学院大学の大田さとし先生、都立大の加藤芳太郎先生。

馬場　だから、この中に佐藤竺先生、あとの先生は私は全然付き合ったことがないし、この区議会史なんですよ。

古賀　初めて出てきました、区議会史です。

馬場　区議会史をつくるというか編さんするときのチーフみたいな感じだよね。一番最初に名前が載っていますよね。この先生の話を聞くと、余分な話ですよ。毎日、新聞を取っているでしょう。新聞の広告は裏が白い紙になっていて、全部集めて、とにかく物がなかった時代なんです。その裏に、広告の紙は割合と書きやすいんですね、滑りがよくて。今のいいボールペンとか何かはない時代ですから、滑りが悪いので、とにかく広告の紙の裏は大事だと言って、それに片っ端から思いついたことをみんな書いていくんだよと、そんな冗談も言いながら、とにかくいろんなことを世田谷区のためにやってくれた先生だと私は思いますし、非常に温厚で、私なんかも随分、この先生、お酒も飲むんですけれども、甘い物も好きな先生で。

古賀　想像とちがいますね。

馬場　ようかんをもらうと、ようかんを全部自分で刻んで、御飯に乗せて、おはぎみたいなものにして、それでいて、仕事を終わって、一緒に一杯行こうかなんていうときには付き合って、ちゃんとお酒も普通に飲むんですよ。べらぼうに酔うほどの話じゃありませんけれども、普通の付き合い。それでいて甘い物が大好きだった。ようかんを刻んで御飯にかけると言われて、私も相当甘い物は好きだけれども。とにかく、そんなことの話のできるざっくばらんな先生だったと。非常に優しくて、非常に話しやすい先生。そこいらが人間性のあれからきて、大場区長も気に入って、それから、学究のというか、そういう先生だけがすべて執筆できるわけじゃありませんから、その下で執筆の助手的なことをやっていたのが先ほど言った田中勇輔という総務課長をやってのちに、総務部長をやって、最後、川場村に行って、退職した職員なんです。この田中勇輔さんという人の存在も大場区長にしてみればすごく大きい。佐藤竺先生との関係からいって、いいペアを組んでいたように私は思われます。

古賀　では、文化のほうに移らせていただく前に、今までのお話で気になった点とかがあれば、研究員のほうから質問をしていただけると思うんですけれども、じゃ、手を挙げてくださっているので、金澤さん。

金澤　玉川支所で統計調査係をされていたということで、ちょっと御記憶にあれば教えていただきたいなと思ったんですが、統計調査は、今だと割と国勢調査とか調査員の人とかを町会の人とかにも推薦すらしてもらうのが難しいとか、そんな感じなんだというふうなことを聞いていて、これはものすごく昔の話なんですけれども、その頃の統計調査はどういうふうにやっていたのかなと。

馬場　これは、いわゆる3所に分かれてた統計調査係というのがあったんです。選挙になると選挙のほうが主体になってくるような統計調査だったんですけれども、当時の統計調査は、例えば国勢調査にしても何にしても、まだ多少なりとも世田谷区役所、公に対してそんなに強い反発がなかったので、町会を通じて頼むんですよ。そうすると、調査員はそんなにひどい反対もなくて、まあまあに集まってくるんです。その頼みに行くときは、私が最初に入った出張所を通じて、出張所の所長のところに総務から、調査費ごとに区割りがありますから、どこどこの出張所は調査員を何人依頼してくださいと、所長のところへ行きます。出張所長が町会等を通じて頼むわけです。そうすると、まだ区役所の出張所ということで、割合と調査員もそんなに強い反発もなくて、この前もちょっと言いましたけれども、出張所にいたときに、そういう町の人とも割合とお近づきになったりなんかしてやっていました。

6　國學院大學名誉教授

そんなにひどい、それからプライバシーの問題がそれほど言われていなかった時代です、実を言うと。極端なことを言えば、生年月日から何から全部区役所で把握して、私個人が全部みんなの自宅の構成員から何から全部知っているような、下手すると職業まで知っているような、それでも相手が区役所だからということで安心していたようなところがあったように思います。こちらはこちらで、それなりにちゃんと守るべきものは守っていたようにも思います。それでも、何かに使おうと、それから、今みたいに何かがあって、一斉にばっと広がっちゃうみたいな時代じゃありませんから、そういう点でも、割合とそんなにひどくなかった。だから、調査員が各個人の国勢調査で調べに行っても、ほとんどいれば回答というか、相手から聞き出せたという時代です。だから、今の時代とは全然違っていたような気がします。ですから、そんなことで調査員を頼むのも、多少、調査員として仕事があったり、何かあって、私はできませんという人も中にはいたと思いますけれども、でも町会長さんとかに頼んでやってもらうと、まあまあに調査員は集められたというか、お願いできたような気がします。今とは随分違っていました。

金澤　ありがとうございました。

古賀　大石さん、ありますか。

大石　私は今、係員なんですけれども、係員になって、主任になって、係長という順番なんですけれども、当時は主事の次にすぐ係長みたいな感じなんですか。段階とかは。

馬場　当時は、雇員、吏員という身分制度があって、採用試験に合格して、入所したときはまず雇員、数年後に吏員昇任試験に合格すると吏員という身分になります。ちなみに雇員は主事補、吏員は主事という職務名で職務を執行していました。吏員昇任試験に合格し、吏員（主事）となり数年して係長職に空きがあると、主事（吏員）の中から順次係長に昇任していったのです。したがって係長試験というのはなかったんですよ。主事といっても、係長でも何でもないですよ。

大石　その次はもう係長になっちゃうんですか。

馬場　主事というのは、仕事の上では、こういうところへ何とか主任なんて書く、そういう話は全く、主事なんて書く人は一人もいないし、だから、もっと極端なことを言うと―そうか、あの当時は入ったとき、主事じゃないんだな。主事という名前の主事の試験があったんですよ。なぜかというと、吏員昇任試験というんですよ。当時は3級職だったかな。だから、係長試験じゃないんですよ。吏員昇任試験に受からないと、今度は係長になるときになれなかった。吏員昇任試験に受かって何年かすると係長、係長試験というのはなかったんですよ。

大石　試験ももちろん東京都の試験ということで。

馬場　吏員昇任試験というのは東京都が一斉にやるんです。大学の教室を借りて。

古賀　その中で、実は伺いたかったんですが、世田谷に配属されてから他区に異動というのはなかったんですか。

馬場　人事交流というのはありました。というのは、こんなことを言うとあれですけれども、特に女性なんかでほかの区の人と結婚して、できればそっちへ行きたいとか。ただ、そう数は多くないんです。というのは、やっぱりこっちも都合があるし、ただ出すだけでも困っちゃうし、もらうのも枠がないともらえない。もらうというのは変な言い方ですけれども、来てもらうのにもね。そんなに数は多くないけれども、それは東京都の職員ですから、23区ごとの交流もありました。中には、私の友達2人は小笠原に行っていますよ。特に親しくしていた品川の職員が2人で希望して、小笠原に行っています。それから、博多、福岡か、向こうのほうに都の出張所か何かがあるじゃない。何かあると思って、そんなところへ派遣されてみたり、東京都の職員ということで、行くつもりなら行けて、希望も出せた。

箕田　今はもう都区間交流は基本的にはなくなってしまったんですけれども、区同士の交流は今もありますよね。東京都の職員の方は、例えば福祉保健局に入られたら、ずっと福祉保健局が通常なので、多分、それと同じで、区役所に配属された

ら、その区でということでよろしいんですね。

馬場　そういうことなんですね。

古賀　今、教員とかは都で採用されて、東京都の教育委員会の職員で、二、三年で他区に異動したりとかするので、そういう感じとは違うんですか。

馬場　また全然違うんです。教員の場合は世田谷区に人事権がないわけですよ。東京都の教育委員会が持っていられるわけです。ただ、区の職員の場合はそうじゃない。

古賀　教員の方はすぐに他区に異動してしまうので、あまり世田谷のことを知らずに異動してしまうというのが課題と聞いていたことがあるんですけれども、そういうことはなくて……。

馬場　ただ、福祉とか何かの場合は、福祉とか保健所が区に移管になったでしょう。そんなことで、最初のうちは福祉関係の職員と、私がちょうど人事をやっていたときなので、非常にぎくしゃくした関係ではありました。私は福祉でずっとやってきたんだと、それが世田谷区に来て何年かしたら、世田谷区でどこか別の場所に行けって何事だ、俺は福祉なんだ、私は福祉の仕事が天職とは言わないまでも、ずっとやりたいと思って来たのに、どうしてこんなところにというような話は何年か続きました。極論すると、発令の通知書、辞令をもらいに行かないとか、そんな人も何人かは、1人か2人でしたけれども、いたことは確かです。ただ、そういう配慮をしながら人事の配置をしていました。

　そういう意味でいくと、そういう移管に伴って来た都の職員との間では多少葛藤というか、やっぱり職員にしてみれば、東京都ということとあわせて、福祉の仕事、保健所の仕事をやるつもりで入ったにもかかわらず、こっちへ来させないで、別の仕事をさせられた人は、逆に言えば、数でいったら例外と言ってもいいんじゃないかなと。あとは区々間交流、区と区の間の交流、その前が都区間交流でしたよね。ただ、非常にそれも数は少ない。ただし、さっき言った管理職だけは、課長以上については、何年か来て、中には何だよ、腰かけじゃないかなんていう、すぐ帰っちゃう、帰りたい、帰りたいというのもいたようですけれども。そんなところですかね。ただ、どこへ行っても人事の問題というのは、人間ですからすべてがスムーズにいかない、事務的に処理できないという話。

せたがやふるさと区民まつり

古賀　ありがとうございます。引き続き、ちょうど年表のほうにもあるんですけれども、昭和53年の4月に総務部の副主幹になられて、これで文化事業の担当になった。ちょうどその昭和53年に第1回の梅まつり、第1回のふるさと区民まつり、第1回の世田谷美術展というのが開催されていて、そのあたりだと、どんな感じで関われたのかとかを伺えればと思うんですけれども。前回、インタビューさせていただいたときには、大場区長から文化をやれという御指示があって、されることになったということでした。具体的に例えば御苦労された点とか、そのあたりを伺えればと思います。

馬場　わかりました。一つだけ最初にお断りしておきたいのは、この年表の中に、53年の2月に第1回梅まつりというのがありますね。このお祭りは私はやっていないんですよ。別の課長がここでやれと言われてやったんです。やってはみたけれども、あまり気が入らなかったように思います。というのは、お祭りなんてやったことがないのが区の職員ですよ。誰も知らない、何をやっていいかわからない、町場の人とどういう付き合いをしていいか、何していいかわからない、何もわからないんですからね。梅まつりだから、梅の下で何か一杯飲むようなことでもやればいいのかと、何をやっていいのか検討がつかないよね。そんなことで2月にやったけれども、あまりいい感じで進まなかったのかしら、それとも本人が嫌だと言ったのか、自分が適任じゃないと言ったのか、そこいらはわかりませんけれども、たしかこの年の4月に、私が文化事業担当、言うなればお祭り担当みたいな感じで命じられたわけですよね。

せたがや梅まつり（1978）
出典：世田谷Web写真館

そこでやってみて、お祭りでの苦労話というのは、今までにも苦労はあまりないとよく言っていましたけれども、じゃ、苦労は何だ、どんな苦労があるのか。体を動かすこと、肉体的な苦労、作業に伴う時間の拘束とか、そういう苦労と、それとほかの人との付き合いからくる人間関係的な面の苦労とか、あるいはそういう事業がうまくいかないとかどうのこうのといったような心の問題としての苦労があると思いますけれども、若かったんでしょう、体の苦労はあまり感じなかったし、あってもすぐ回復したというか、結構楽しんでやっていた。

大変だったのは、確かに人との付き合いとか何かというのはありましたけれども、よくよく考えると、みなさんは当たり前に思いますけれども、一企業、民間と違って、区役所の場合は利益が目的じゃないのね、今思うと。実を言うと。この前のときもそんな話はしませんでしたけれども、ここで、この次、インタビューということで少し考えて、ゆっくり寝ながら考えたんですけれども、とにかく利益を出さなくていい、成績を問われない、こんな楽な事業はないといえば、ないでしょう。一民間企業だったら、利益を出さなかったら、多分、即、首。利益が出なくても、とんとんぐらいで納めていても危ないかもな。とにかくそういう収益を考えなくていい。それから成果として何人来たとか、そういう評価もほとんど何にもないんですよ。

だから、そういう意味でいうと、今思うと、ああ、あのとき、私が一生懸命やって、みなさんに苦労話と聞かれたときに、苦労はなかった、なかったと言いますけれども、どうもそこいらが苦労につながらない話ばかりで、だって収益もなければ、成績も問われない。終わってみたら、まあまあ、よくやったなと言われて、それでおしまい。これは一民間企業だったら絶対潰れていますよ。それから財政、お金の問題、収益もそうですけれども、かかった費用についてもあまり考えない。この前もちょっと言った金額ははっきりしませんけれども、課の予算はこれっぽっちしかないのに倍以上かかっちゃったといったら、担当の助役がおまえ、よくやった、わかったわかった、あとで予算をつけておくから、予備費を回しておくからいいよなんて言って、それでおしまいなんです。こんな話、どこに行ってもないですよ。そういった点からいくと、あまり苦労話はなかったのかなと。

古賀　そのときから、もう実行委員会形式でやっていたんですか。

馬場　というのは、この4月に私が任命されて、何をしようと。とにかく誰もやったことがないわけですから、ただ、区長が新年の馬事公苑の園長と、前の年かこの年だったかな、いつだったか対談で話して、園長から馬事公苑を使って区民まつりをやりたいならどうぞと言われたから、おまえ、やれと、それだけですものね。何をやれと、何もないんですから。

そこで、私なりに考えたのは、とにかく世田谷区全域から人に来てもらって、協力を得られる、これには町会が一番、世田谷区全域をカバーするには一番いい。そうすると、町会も、連合会の会長は誰かというと、大場代官さん。私がさっき言ったように世田谷区の肩書だけもらって、大場代官さんに会いに行くわけですよ。これも誰もいないんですから、1人ですよね。だって5人しかいないんだから、私が1人で誰か部下を連れてくると、あと残り3人しかいないから、仕事が何もできないから、何でもいいから準備だけはしておいてくれと、こっちがある程度の指示をしながら、折衝だけしてくれと。そうしたら、肩書だけです、まさに会ってくれるのは。会ったら気が合ったのか何かよくわかりませんが、快く会ってくれた上に話も弾んで、実行委員長を即引き受けてくれま

したね。1回で引き受けてくれました。

いろんな代表、まず町会の代表、それから、それぞれの誰をあれしたかわかりませんけれども、商連のいろんなところのメンバーを実行委員にしたいので、その中の実行委員長を大場代官、そうすると、とにかくあの当時、今もある程度そうですけれども、世田谷区で大場代官家というのは、由緒あるというか、しかも、ちゃんと代々続いていて、人望もあって、たまたまいい人が世田谷区にいてくれたわけです。大場さんといえば、誰でも知っているわけです。大体、大場区長が当選したのは、大場姓ですから当然当選したんですから。あの当時、別の姓だったら落ちている、あの人は。

古賀　ご本人もそういうことを本で書かれていました。

馬場　そうでしょう。そのくらい大場姓というのは、だって、大場代官の親戚だと思われた人が相当数いたんですよ。

古賀　親戚じゃないんですね。

馬場　たまたま名字が一緒だった。大場区長はどこの出身かというと、山形です。たまたま大場。だから、私が馬場で出ても、多分、場所つながりで当選したかもわからないんですけれども、大場というのは強いんですよ、世田谷では。

それはともかく、そういう人が実行委員長になってくれたと、しかも気持ちよく引き受けてくれた。大場実行委員長の名前で協力依頼の文章を書いて出すと、大体みんな信用してくれて、ほとんどオーケーですよ。反対と言われた人は一人もいなかった。こっちがもくろんだ人で、多分いなかったと思います。区議会の議員さんまで、大場信邦さん、要するにお代官様のお名前が出ると、反対も何もしないんですから。やっぱり大場代官の名前というのはすごいですよ。ただ、よくよく考えると、大場代官さんの世田谷区の管轄区域なんてこれっぽっちなんですよね。だって、代官ですから、大名じゃないんですから。司法権、警察権のほんの一部ですから、持っているのは。ただ、由緒ある家だったのと、大場さんが非常に人望のある人で、人間的にもすごく立派な人だったということで、いかに人間性がよかったのかなと。

私にしてみれば、すごくいい人に恵まれて、4月に行って8月に区民まつり、その間に多摩川の灯籠流しも実を言うと入っているんですよ。抜けちゃった?入れていないと思った。これは灯籠流しを多摩川でやって、その上に、ベースに何もないんですよ。よく言いますけれども、時間の関係でいいの。私は時間がいいからいいとして、区民まつりは何をコンセプトにしたかというと、この前から言っているように、誰でもが参加できること、それからお土産が必ずあること、参加した結果、まあよかったなと思える、この3つだけを主眼としてやった。

誰でも参加できるって何だと考えたのが盆踊りです。盆踊りは、いつ来ても、制限もなければ、小さい子から大人まで、どこの町会の人が来て、すっと入っても入れるし、輪さえ大きくしていけば、いくら広がっても、あの馬事公苑なら大丈夫だなと、そんなことで盆踊りをやった。それには、町会長に頼むしかない。大場代官様の名前で地元の町会に一言言えば、もう実行委員長の名前が大場信邦と出た途端に、反対もしないで、いいですよ、協力しましょうと。

お土産が必ずあることというのは、露天ですね。店が出る。たとえいくらでも必ず名札を出して、露天商みたいに、ぼっちゃいけないよと。とにかく値札をきちんと出して、小さい子どもでも何でも安心して物が買える、そういう物が買えるということ、お土産というのはそういう意味なんです。それから、できれば、ふるさとのお土産があれば、だって、4月に行って、ふるさとのどこかに出てくださいといっても、出るところはどこもないですよね。取りあえずは商店街に頼んで、商店街のブースを全部出してくださいとやって、それでお土産と。

それから、必ず来てよかったなと思えるようにということで、全体の雰囲気をいろいろと考えて、参加したなという雰囲気が出せるもので何か考えようと。子どもから大人までで、さっき言った盆踊りもそうだけれども、子どもということになると、区の児童館、ここを活用しようよと児童

館にちょっと行って、児童館のメンバーはとにかく幼児子どもが好きですね。ああいう子ども相手は大好きですから、すぐやってくれたと。結果として、非常にいい協力が得られて。4月から始めて、今思うと、よくね。だけれども、さっき言ったように、何人来るという目標もないし、何人しか来なかったら駄目だと上からも言われていないし、何人来たからよかったなとも言われていないし、とにかく成績も利益も何にも考えなくてよかったというのが、これは民間じゃ考えらえないことです。しかも財政的なものまで、だってお金がかかるわけですから、ちょっとしたものを頼んでも、みんなお金がかかる。当時の経理課の検査も通さずに全部使っちゃうんですから。当時の課長だか部長にあとで呼び出されてというか、ちょっと来てくれと、いいかげんにしてくれと言われましたけれども。だけれども、そんなことはともかく、苦にならなかったというのは、今思うと、そこいらがあったからじゃないかなと。成績に関しては気にしなくてもよかった。利益を気にしなくていい。それから、今言ったように、人が気持ちよく協力してくれた。そういうところで、取りあえずは、うまくいったのかな。

古賀　初めての実行委員会形式で、行政主導ではなくて区民の方……。

馬場　と言いながらも、実質的には区民の実行委員会が集まってやりましたけれども、ただの一人として区民まつりを知っている人はいないわけですから、どんなことをやるんだ、何をやるんだ、何を言われてもわからないわけですよ。行政主導も何も、行政主導なんていう言葉も使わないし、こっちはこうやりたい、こっちが今考えていますのは、こんなところで、みなさんには迷惑をかけないようにして、うちのほうでできるだけここまでやりますよと。とにかく御協力いただきたいと言うだけで、そこいらはみなさんに負担をかけないで済ませたいのでと。当然、お金の問題も、寄附の集めもないし、普通、町会とか何かでお祭りをやると、どうしたって寄附というか、多少何がしかの寄附を募りますが、区役所がやっているんですから、お金は一銭も頂かないと。実行委員会で決めるのに、こっちが主導したわけじゃないけれども、一方的な説明ですよね。別に文句を言う人もいないし。盆踊りをやるの、じゃ、何時からなの、何時頃、どこへ行って。とか。

古賀　このときは、もう前回のインタビューをさせていただいた秋山さんとはお会いしてたんですか?

馬場　全然まだ、秋山さんは私が文化の担当課長を辞めたあとなんですよ。だから、この当時はあくまでも実行委員長は、全部、大場信邦さんでした。その後、大場信邦さんももう年で、いいよというので秋山さんが実行委員長をやってくれました。

古賀　世田谷美術展の話を少し伺えればと思うんですが、この前のせたがや学[7]のインタビューのときに伺って、世田谷のいろんな絵画の会派があって、それを一つの絵画展で展示するということは、かつてはタブーだったんだけれども、そこを一緒に展示しようということで非常に御苦労されたというお話も伺っていたんですが。

馬場　そこいらも御苦労というか、本来、芸術の分野、美術の分野といっていいのか、日展系、文展系、行動派系、いっぱい会派があって、ほかの会派との反目の強いこと、については、とにかくすごい、何をやっているのか、私はあまり感じませんけれども、会派間の何かがあるみたいなんですよ。そこで、世田谷はとにかく世田谷美術展をやりたいと。この美術展はプロですね。区民絵画展というのが、ここで一緒にやっていたのがアマチュアだから、一般区民から絵を募集して、第1回の世田谷美術展の開催をやりました。世田谷区に日本でも一二と言われる美術評論家の人が2人いまして、ちょっと今名前が出てこないんですけれども、その中の1人が、美術評論家ですから、ほかの美術展の画家たちもみんな一目を置いているような感じなんですよね。そういう人がたまたま挨拶で、とにかく世田谷美術展というのは会派を超えてこれだけの人がそろって出品してくれるという、ほかにはないよ、できないよと、これは区の功績というのか、世田谷区ならではだなみたいなことを言ったのは、私としてはすごく印象に

7　平成30年度せたがや自治政策研究所研究・活動報告書「せたがや自治政策Vol.11」p97～参照

残っています。ただそれだけなんですけれども。

それで、この美術展の開催をやりながら、大場区長の挨拶の中なんかには、行く行くは世田谷美術館をつくりたいんだみたいなのが入っていたと思います。だから、画家というか芸術家にしてみれば、ああ、何か美術館をつくることを前提にやっている。だけれども、美術館をつくってもらったら悪い気はしないなということなんでしょう。ただの一人の文句というか反対もなくて、非常に和やかないい雰囲気の中で世田谷美術展というのが何回か開かれました。だから、そういう意味でいくと、大場区長というのは、こういう美術家、芸術家の世田谷区に住んでいるという条件の中で、その人たちにこっちへ目を向けさせながら、自分の一番のあれは美術館をつくること、そこに向けて、美術展そのものも悪い話じゃないし、目的である美術家館の建設に向けて、うまく人脈、人脈でもないんだな、人の心、芸術家の心をうまくつかんでいったというか、それほどあからさまではないけれども、それとなく、何となく、いつの間にか美術館につながっちゃったなと、その第1回がこれですよね。

世田谷美術館前景（1986）
出典：世田谷Web写真館

古賀　大場区長は文化をやりたかったというのは、何か意味があったというか、何で文化をやりたかったのかというところも伺いたいなと。

馬場　さっき言ったように、とにかく区の行政というのは、どうしてもインフラとか福祉とか、あとは国からの仕事でも、戸籍の仕事だとか、いろんな定型的な地方自治体として当たり前の最低限の仕事というのは当然あるし、そこいらについては、国からの委託の仕事はともかくとして、自分の区としてのインフラの整備だとか何かも、自分の意向があって、できないわけじゃないけれども、言うなれば、これだけではということで、こっちのほうに、それ以外のハード面じゃないところの人と人とのつながりの中、あるいは人の心の中までというか、そういう人との交流面、そこいらをうまく引き出して、それから日常生活の中に少し余裕を持たせていくような、むしろ、人間としてはそっちのほうがかえって大事なのかなと。インフラというのはあって当たり前みたいになっちゃって、それが一番大事といえば大事かもわかりませんけれども、それは誰がやってもインフラはインフラなんですよね。そうじゃないところで何ができるかということを考えていたのかなというふうに、今思うとね。そこに目をつけつつ、自分もインフラというか、結構ハードのものもいっぱい造っていますよ。無駄なものばかり、もう何をやっているんだと、そんなことを言っちゃうとあれですけれども。よくいろんなところの土地をいっぱい、小さな100坪とか200坪、あるいは500坪でもいいんですけれども、土地を区に寄附しますと、もらう場合がありますよね。私は区長に直訴じゃないけれども、あまり区長がもらわないほうがいいんじゃないですかと言ったこともあるくらいなんですよ。私は国とか地方自治体は土地を持つ必要はないという持論で、持っていなくても自然と土地というのは増えてきちゃうんです、公共の中で。国が今、土地があり過ぎて困っているでしょう。実を言うと、わからないような土地がいっぱいありすぎて、個人に対しては応じていないと。世田谷区だって、土地をもらったって、あの維持管理は大変ですよ、草刈りするだけだって。区界の問題とか、いろんな問題が生じますよね。

事ほどさように、ハードなものもあまり造らないでいいです、それはさすがに言えなかったです。美術館やめてくださいとか、キャロットタワーをやめてください、むしろキャロットタワーなんて、私は自分で積極的に進めていたものですから。結局は、あとの人の負担になっちゃうんですよね。何年かしたら、あの維持管理が相当ハードになってくるんじゃない?キャロットにしても

美術館にしても、下手に壊すわけにはいかない、壊すにも大変だしね。だから、結局は、あの当時は税収が……。

箕田　増える一方みたいな。

馬場　バブルでどんどん増えていったんですよ。それはいいんですけれども、そこいらはほどほどに考えながらやっていかないといけないかなと。でも、首長というのは、みんないろんなものをつくりたいんですね。

箕田　土地の話がちょうど出てきたので、秋山さんのような大地主の方というか、そういう方が世田谷区には何人かいらっしゃるということで、今、区の土地を増やさないという話があったんですけれども、寄附をしていただいたりとか、いろいろあったと思うんです。何か政策をおこなうときに、必ず地主の方に突き当たるということはあったということを聞いたことがあるんですけれども、例えばここに施設を建てるとなると、これは秋山さんの土地をまたいでいるから、秋山さんのところに行かなきゃとか、そういう旧来の地主の方との関係みたいな、そういうのがどうだったのかなと。今、大場さんの話もあったんですけれども、この方を押さえておけば間違いがないとか、そういうところをちょっと伺いたいなと。前回、秋山さんがいらっしゃったので、ここが突っ込めなかったというのはあるんですが、地主の方というのはキーパーソンとして、世田谷はいらっしゃったのかなと思って、大きかったのかなと。

馬場　私は逆に、ああいう大地主の人は、区が何かやろうとしたときに、どうしてもその人の土地か何かの一部が使わなきゃいけないというところには、逆に協力してくれたのかなと。むしろ、そうじゃない、あまり大きくない土地を持っていた人が、もっと高く売って買ってくれとか、ここを削られたら今度は使い勝手が悪くなっちゃう、そういうあれがあって、それはよくわかりませんけれども、折衝をしていないので。むしろ、大地主の人はやりたいと思った施策について、ここに保育園をつくったりとか、ここにどうしても何か別の施設の小さいものをつくりたいみたいなときには、逆に協力してくれた。といって、総合運動場なんかをつくるとき、やっぱり地元の畑、農地が削られるというか減らされるということで、相当な反対はあったとは聞いています。それはこっちの佐野さんのときだったかな、もっと前だったかな、何かあるんですけれども、これは、とにかくあれだけ広大なところですから、もうあんな広大な土地を使って、世田谷区が何かを建てようということはできないと思いますけれども。ただ、大きな地主さんについては、逆に大地主さんのほうが折衝は楽だったんじゃないかなという気はしますけれども。協力的だったんじゃないかなと。例えば秋山さんなんかのところだと、まだ、昔の玉川第6出張所、ほとんど秋山さんの土地じゃないかなと、今思って。

箕田　深沢?

馬場　深沢出張所。

箕田　深沢ですか。

馬場　多分、そうだろうと思う。まちづくり支所というの?出張所というの?

田中　まちづくりセンターです。

馬場　あそこの土地は、前の畑みたいなところも全部含めて秋山さんの土地のままですよ。だから、区はほとんど無償で借りているんじゃないのかな。土地代はほとんど払っていないだろうと思いますけれども。

大地主さんというのは、世田谷区のもともとの在来の地主さんというのは、土地に関しては、そんなに障害になったという話は聞いていないです。真中の交差点の真井さんという大地主さんと中村さんという大地主さん、真中の交差点の名称は、両方の土地の接点だったので真中になったというんですけれども、その中村さんという人が自分の家の、私がトラスト協会にいたときに、秋山さんがもちろん理事長をやっていて、私が事務局長で、何かで行ったら、自分の家の前に700坪、土地があって、木が植わっているところをトラスト協会に全部寄附するから受け取ってくれと言うんですよ。条件は、そこに建物を建てないこと。自宅なんですね。もう年はあの当時で70を超していたんです。すぐ死んじゃうのにもったいないなと思って、すぐ死んじゃうのに余分なことばっ

かり言うなと。そうしたら、その700坪の土地をトラスト協会のものとしたら、税金の控除とか、トラスト協会というのは公の施設でも何でもないんですよ。そうすると、世田谷区に、公共に寄附したということで、税金か何かが、700坪の金額が、いくらか知りませんけれども、自分の総所得から寄附したことになって、その年、減らせたりとか何かもあったんじゃないかな。とにかく土地をもらってくれと。実を言うと、先ほど来、あまり土地が欲しくないものでしたから、自分の土地ならすぐなくなるというので、公共の土地だと維持が大変だと思ったんですけれども、相手の意向もあるし、しようがない。じゃ、区長と相談しますからと。変な話、私が大場区長の部屋のところに行って、どうでしょう、もらったほうがいいですかと言ったら、すぐもらえと。トラストじゃもらえないから、区のほうで手続きして、もらったんですけれども。

もともと大地主さんというのは、前にマンションとかを造られたら自分の家が日影になっちゃうから、売ればすごい金額が入ってくる。だけれども、入ってきても、相当の金額が税金で持っていかれちゃうから寄附しちゃう。何かで問い合わすとトラストがやってくれるというのかな。結果は区の物になったんですけれども、割合と地主さんというのは協力は得やすかったのかなという気もしないではないです。余分なことばかり言って、すみませんね。

古賀　お時間も近づいてきましたので、質問タイムに、今まで伺った話の中で、誰か。

馬場　じゃ、一つ、逆にこっちから聞いていい?

古賀　お願いします。

馬場　聞くほどの話でもないんですけれども、この質問項目[8]の中に、一番最後のところ、今後、世田谷が住民自治の推進のために何をなすべきか。その前の住民本位の区政、それはいいんですけれども、どうですかという質問があって、私はよくわからないんですけれども、この住民自治というのは、どういうことを言っているのかなと。何をもって住民自治というのかなというところなんですが、その答えがどうこうじゃないので、先に言っちゃいますと、住民自治というか、言葉尻を捉えて言っているみたいで、ごめんなさい。

自治という言葉は、ある面において統治するみたいな表現にもなるわけです。自分たちが自主的に一定の住んでいるところなんかを統治する。そうすると、統治するということ、こんなことは皆様、百も承知だと思いますけれども、治めるということは、当然、地域、区域がなければいけないわけです。世田谷区は当然自治体ですから、世田谷区の区域があるわけです。区域があって、かつ、それには税金なり収入があるわけですから、財政が伴うわけですよ。そこには人がいるわけです。地域があって、財源があって、人がいると。こういうことからいくと、果たして住民自治というのは本当にできるのかな、可能なのかなと。ここで言っている住民自治はちょっと違うのかなという気はしないでもないんですけれども。

一般の人、地域の中に、一定の区域の中に、まず住民自治と言ったときに、住民の中に区域、地域が設けられないんじゃないか。町会なら町会でもいいですよ。だけれども、町会の区界なんて決まっているわけじゃないし、財源なんていうのは、ほとんど一般の区民の人から町会費を集めてもらう、そのくらいはいいですけれども、税収として強制的に取れない。だから、入っても入らなくてもいいみたいな話でいくと、財源はほとんど持ってこられないというところでいくと、すでにいわゆる自治の2つの条件がなくなっちゃっている。そうすると、残る自治というのは、よくよく考えると文化しかないのかなと思うんですよ。自治と言いながら。いわゆる人と人とのつながり、人との交流、それから何かイベントをやること、そういうのが自治ならあれだけれども、私が企画にいたときから、あまり住民自治というのはどうなんですかみたいな話をしていたことがあるんです。だから、あくまでもこれは住民参加なのかなと。

住民参加をもって住民自治と言っているなら、それでも別にいいんですけれども、住民自治というのは、一般的でしょう。どこのところに行っても、日本全国、自治法の解説書とか、あるいは地

8　事前の質問項目

方自治体の経営、運営みたいなところを見ても、住民自治というのは当たり前に言われていますけれども、私は住民自治というのは、どういう意味で使っているのかなということを考えていくと、どうも住民自治はある面においては文化なのかなみたいにちょっと思ったもので。余分なことを言ったけれども。その文化というのは、逆に言うと広い範囲になってきちゃうので、この範囲ですよという定義がなくなっちゃうんですけれども、そのために何をすべきか。だから、住民の福祉向上だけじゃなくて、福祉は福祉でいいんですよ、それから、インフラの整備もそれはいいんですけれども、それがないところの人と人との精神的な面で、心の成長のために何をなすべきかみたいなのが住民自治かなみたいに思ったもので、余分なことを言って、学者先生からはたたかれちゃうかもわからないけれども、それは承知の上で、この住民自治というのは何を指すのかなと思って。

古賀　地域行政の真の目的ですよね。住民自治の位置づけをどう考えるか。

馬場　本当に自治ができるならいいんですよ。だけれども、自治というのは、今さっき言ったように、統治するということは、区域がきちんと決まらなきゃいけない、財源もなきゃいけない、そこに住んでいる人はきちんと地域の中に登録されなきゃいけない。今、日本国民であれば、世田谷区に住んでいるということは住民基本台帳法で登録されていますよね。そういう登録が本当にできるのかどうか。出入り自由だと、自治になっていかない。途中で俺は嫌だよ、あんなものはやりたくないよと、そうやって抜けられちゃう。それだと、自治が果たしてどう進んでいくのかなということを考えると、ある面の自由度を持たせると、そうなってくると文化行政なのかなみたいな。私の考えはどこへ行っても通らないかもわかりませんけれども、そんな気が若干しました。

あとで、今後、世田谷区は何かすべきか。具体的なものと言われると、何となく、えっ、なんて思われるものもないわけではないんですけれども、とにかく具体性を持たせて、いろんな意味で、住民自治にしても地域行政にしても具体的なものがないと、言うならば絵に描いた餅じゃないけれども、学者先生になっちゃって、区役所の職員だったら、ある程度具体性を持って進んで、駄目なら下がればいいわけですから、失敗したらやめればいいわけですから、先ほど言ったように、どこからも何も言われないですよ。とにかくやってみること、それがいいのかなみたいに思ったもので。あまり話の論議論理性もなければ、考え方もいいかげんだし、説得力もない話ですけれども、そんな気がちょっとしましたね。

古賀　自治と関連するかどうかわからないんですけれども、秋山さんが玉川独立運動を仕掛けた方というのを前回でも……。

馬場　豊田さんといったかな。

古賀　そのあたりが伺いたかったんですけれども。

馬場　そこいらは、私は実を言うとほとんど知らない。

古賀　この延長で玉川の話を出させていただきました。

馬場　あの独立運動なんていうのは、住民自治の最たるものだろうと思います。あれで独立すれば、玉川という区域の中で、その代わり、自分たちで、当時は玉川村ですよね、村民税を集めて、その村民税の財源の中で、住民の福祉の問題、インフラの問題、いろんな問題、学校教育まで考えていかなきゃいけないのかな。ただ、東京都の場合はどういうのが都政であり、区政であり、区政と言わないまでも村の政策なのかなというのがわかりません。そこいらをしていくにしても、やっぱり地域があって、住んでいる人がいて、財源、この3つはそろわないと、玉川村の自治も多分成立しなかったんだろうと思いますし、それにはいろんな意味で、住んでいる人が反対したのか、東京都なり、当時の法制度がうまくいかなかったのか、どうしたのかというのは、ちょっと私にはわからないんですけれども、なぜ挫折したのか、ちょっと私はわからないですけれども。

ただ、時々そういう独立運動がないわけではないですよね、全国的にも。日本の場合は少ないと思いますけれども。日本の行政制度というのは、

国から始まった行政制度は、すごく平和でいい行政制度ですよ。地方自治だってすべて確立されちゃったみたいで。大体、地方自治制度そのものが住民自治なわけでしょう、言ってみれば。区議会議員は議会制民主主義とは言いながらも、自分たちの議員をちゃんと選んで、しかも、その範囲の都が調整金みたいなのをやったり、いろんな制度がありますけれども、そういうことを考えていくと、この住民自治という言葉が果たして言葉で動いちゃっているのか、どういう自治なのかというのは、私は少し使い方、自分なりの疑問というか、今までこういうところで出てくる住民自治がいけませんよとか、どうこうというつもりで言っているんじゃなくて、自分なりにそんな疑問を持ちながら、言ってみれば、何か仕事をしていく上で、常に何となく疑問を持ちながらというか、考えながらやっていくのも一つなのかなみたいに思ったもので。もうこれから行政マンには私はなれません。どこも採用してくれません。

古賀　まさに、これまで地域行政に関係された方にインタビューをしてきて、やっぱり一番は住民自治って何なのという答えを見つけたくてインタビューをさせていただいていたような気はします。まだ私の中でも答えは出ていなくて、この地域行政制度そのものは真の住民自治の実現を目的に制度が開始されたんですけれども、真の住民自治って何なんだろうというのを探っていかなきゃいけないというか。

馬場　私はちらっと言ったこともあるんですけれども、当時はそんなものを学者先生が受け入れてくれるはずがないし、学者先生に直接は言いませんでしたけれども、職員の中で話していて、本来、住民に自治って私はないと思うよみたいなことを言ったことはあるんです。だって、地域も財政も何も決まらないものを、どうやって住民自治をやるんだよと言ったこともあるんです。でも、それはそれで、その場で話合いはおしまい。その先は誰も進めませんでしたし、私もそんなにこだわっていないから、進めてもいかなかったです。

古賀　多分、その辺の事業が枠の中ではできていないか、されてこなかったか。なんですかね。

馬場　そこいらはわからないところですよね。

古賀　しないできちゃったのかわからないですけれども、そこの答えを知りたくて私自身インタビューをしているというところはあります。

馬場　もっと極端な話で、私の持論としては、ここでいう住民自治はありませんと。住民参加ですと。住民参加はぜひ必要だし、ますます進めていかなきゃいけないし、これはどんなことがあっても住民参加は絶対必要なことで、その場合、私は住民自治じゃなくて、ここはあくまでも住民参加。その参加の形態は、それこそ多様性というか、何かありましたよね、ここに。ダイバーシティというか、多様性の中からというふうに、この多様性ですよ、まさに。今、引っ張り出した中で（新聞記事を見せて）、上、中の中だけでいいんですけれども、私の好きな、自分の趣味の山登りのあれですけれども、コピー、これから使うのは真ん中だけです。余分なことを言っていいのか、みなさんの時間はいいの?私みたいに何時間でも暇がある人とお忙しい人とは違いますから。これは知っているよね。どこかの区が駄菓子屋をやり出した。文化の一つだね、この居場所づくり。私なりに別の具体的なものもありますけれども、別にそれをここで言ったから実現する話でもないし、必要があるなら言いますけれども、あまりなければ、別に。

古賀　そう言わずに。

　ちなみに、この中の中の……。

馬場　中の中のここのところ、健康とは、単に病気ではないとか未病じゃないとかではなく、身体的、精神的、そして社会的に良好な状況であるというのを定義していますということでしょう。それで、ここへ来て、登山の前に頂上に立つことを楽しみにしていると答えたが35%、しかし、登山後は59%がうれしかった、楽しかった。だから、こういうみんなと付き合って、そうすると、また登山前に楽しみにしていることで一番多かったのが山の自然でした。しかし、登山後は友達と一緒の活動が1位になったと。7割の生徒がうれしかったと。だから、結局は文化なんですよ、人間関係なんですよ、すべて。心の健康と言いなが

ら、心の健康というのは文化ですから、そこだけです。真ん中のページだけ、もしあれだったらコピーを取ってもらってもいいし、要らなければ要らないで構わないです。

金澤　これは、たしか造ろうと思っていた建物が古くて、別の建物を探していた。だから、これはやるはずなんです、場所を探して。

馬場　その建物は古いので、建築基準法に引っかかっちゃうんだ。

金澤　そうですね。築20年という話だったのが、調べたら本当は築60年となっていて、それはちょっと無理だと。

馬場　それでか。ペンディングというのはそうじゃなくて、別のところを探している。

金澤　別のところを探すということになります。

馬場　だから、世田谷区にもこんなものがあると楽しいなと思って。

金澤　江戸川ですね。

馬場　今は、世田谷区は学校はまだ減っているの、小学校、中学校は。あるいは減ったところ、使っていないところはいくつかあるの。例えばここもそうだよね。学校の跡だよね。

田中　62校です。あそこの守山小学校は保育園と福祉作業所、あと区民センターみたいな感じで。

馬場　学校じゃなくてもいいんですけれども、そういったところを使う、駄菓子屋じゃなくてね。子どもの遊びみたいのがありまして、言ってもお話にならないでしょうけれども、区民まつりと併せてもう一つ、ジオラマパークみたいな、世田谷区に京王線、小田急線、それから玉電、今、玉電と言わないんだ。

田中　田園都市線です。

馬場　子どもから大の大人まで、動くものはとにかく好きですから、模型をいっぱい集めて、それから町並みをつくる。ジオラマパークですよ、まさに。そうすると、これはあまりお金がかからない。それから、廃校みたいなところを使うとできるのと、小さくしたければ、区民の中で小学生とか中学生で好きな人、あるいは学校の中にそういうクラブがあって、ある程度つくっておきたいなと思ったときに置いておいて、それで、それこそ何十年もして古くなったら取り替えちゃってもいいし、やめてもいいし、そんなことでいくと、いつの間にか、そこに子どもから小学生、もっと小さい子から、列車の型のあれを集めている人はいっぱいいますよね。それから、売っているのもいっぱいあります。ああいうのを集めている人が持ってきてくれるとか、いろんな参加ができると面白いかなみたいな、そんなことで、とにかく人とのつながりを。私がたまたま自分が山が好きだったもので、日本の1番から5番までの山は取りあえずは全部登っていますので。1位の富士山は誰でも知っていますけれども、2位は知らないんじゃないかな。2位の山は間ノ岳という山で、名前を聞いてもわからないでしょう。南アルプスにある山で。2位が北岳だった。3位に穂高と間ノ岳、5位が槍ヶ岳か。今、一瞬、4位がどこかいっちゃった。たまたま全部登りましたもので。

古賀　すみません、お時間が過ぎてしまった中、長いお時間、ありがとうございました。

馬場　こんな話で本当によかったのかしら。恥ずかしくなっちゃう。質問したけれども。

古賀　ありがとうございます。私が伺いたい話は全部伺えたなと思いまして、最後、住民自治の話はもっとお聞きしたかったですが。

馬場　これは、あまり私の話は気にしないでください。自分の持論だけの話で、私はこれをとやかく言うつもりもありませんし、とやかく言えるようなあれは全くありません。

金澤　都市美委員会とか都市デザインの話も伺いたかったんですけれども、ちょっと時間がないのであれなんですけれども。

馬場　何?

田中　都市美委員会とか都市デザインのことも。

馬場　そこいらはわからない。それは全然知らない。

田中　そうなんですね。

馬場　私は関わっていませんでした。

古賀　金澤さんはトラスト協会のことを聞きたいと言っていたね。

金澤　そうですね。トラストは、トラまちになる前のトラスト協会の頃の話は実はあまり知らな

くて、今でもトラストまちづくりでやっているトラスト運動のことを基本的にはやっていたということなんですか。くっついたときにやめちゃったものがあるとか、そういうことではあったのかなと。

馬場　私も実を言うとトラストは1年しかいなかったんですけれども、自分があそこで事務局長をやって、秋山さんともそのおかげで仲よくなったりとか、いろんな交流が深まったとか、いろんな功罪の功の部分がいっぱいあるんですけれども、これは記録に残してもらわないほうがいいのかもわからないんですけれども、そういう話ばかりしますけれども、私は世田谷区という地域の中でのトラストの存在というのはあまり評価しないんですよ、実を言うと。ナショナル・トラスト、イギリスのトラストとか、ほかのトラストを見ていますと、とにかく全然スケールが違う。あれだったら、むしろ、私が当時、環境部長をやっていたときのみどりの課みたいなもので十分対応できちゃうんです。

さっき言ったトラストとは言いながらも土地を買ってくださいなんていうのは、区が直接、トラストというのは買ってくださいと言われても、トラストの財産を増やすことは実を言うとできないんですよ。トラストに寄附しても税金の控除は何もないんですよね、今の日本の制度でいくと。だから、トラストが果たして何をすべきなのかなということを考えたときに、私は、世田谷区という地域にしては、トラストそのものを反対という意味じゃないんですけれども、トラストの制度そのものを生かすためには、世田谷区は小さ過ぎることと、それから、トラストで保護するというほどの緑地ないしは自然景勝地なんかが世田谷にあるのかどうかなと。だから、トラストの基金を集めても、多分、世田谷ではそんなに集まらないんじゃないかなと。えっ、トラストとお金を入れる人はそういない。そんな気が私はしています。

だから、トラストというのは、もうちょっと何か生かし方を考えていって、今のトラストを何か方向性を変えるか、いっそのこと世田谷区ではこれ以上育たないということで、どこか別の課で吸収しちゃって。あまりトラストという感じがしない。行ってみて、やっぱりちょっと世田谷の地域は狭過ぎるんです。まだ23区でも世田谷は広いほうとはいいますけれども、ほかの区と考えたら、広いのは大田と世田谷と練馬ぐらい。練馬は大根じゃないけれども、畑が広がって、まだいくらかあったとしても、トラストと言われるほどの広がりじゃない。森もそれほど、ジブリの森じゃないけれども、あれだけの森もないし、世田谷にもジブリの森というか、ああいう森のあるところもないし。今、世田谷で一番広い面積で緑というと砧緑地?そうすると、あれは東京都で、世田谷区のトラストは何も関与できないんですよね。だから、そうすると、トラストとしての機能はあまり果たせないのかなという気が、自分で関わってみて、これはちょっとトラストと言うにはおこがましいと言うとなんだけれども、一見よさそうに見えるんですけれども、それだったら、みどりのまちづくり、まさに公園の面積を増やす。公園の面積はトラストが増やすことはできないんですよね。区に寄附してもらった土地を使って公園、あるいは公園の買収をしていくとか、トラストの基金を集めて、一般区民の寄附で緑地を買収していくということができないし、それほどの緑地もないと。私はそんな気がしました。自分で行ってみて、ちょっと感じました。ただ、区長がやっているのに、あからさまに反対もできないので、黙っていましたけれども。

金澤　ありがとうございました。

古賀　みなさん、大丈夫ですか。

箕田　ちょっといいですか。文化行政の礎部分をいろいろとつくるときに関われていたというふうにお見受けはしているんですけれども、今風の言葉で言うと地域資源という言い方をするかもしれないんですけれども、いわゆる在住作家の方であるとか、活動の団体であるとか、そういった部分を大場区政の時代というのは、うまく行政がネットワークをつくり上げるような働きかけがいくつかあったと思うんです。例えば芸文懇[9]しかり、美術館の運営委員会しかり、ああいうことの働きかけというのは、やっぱり行政から常にアクショ

9　世田谷区芸術文化懇話会

ンを起こしていかないと、自然発生的にはなかなかできないものということなんでしょうか。

馬場　そこいらは、多分、私はそうだと思います。そこで、芸文懇にしても何にしても、やっぱり芸術家の人でも誰でも、わかる人までいかないまでも、何か人間的な面で人と人とのつながりをつくってもらいたいなと思うのが、多分、芸術家でも何でもそうだろうと思います。中には人間嫌いみたいな人もいることはいますよ。だけれども、それは例外であって、みんな誰でもが人と交流したい、人とつながりを持ちたい、それが区の職員と持ちたいという意味じゃなくて、全然別の文化人とも交流がしたい。例えばこっちは音楽をやっている人、こっちは絵の人と交流を持ちたい。いろんな意味でそういうように思っている人が結構いるのかなと思いますので、そこいらを仕掛けてあげると言うと、言い方がちょっとあれかもわからないけれども、そういう意味では、芸文懇なんていうのは……。

箕田　ちなみに、芸術文化懇話会というのは、悪口を言う人からすると、大場区長主催の園遊会と言われていたんです。そこは、区長の名前で招待、区内の美術しかり、音楽しかり、芸能しかり、小説も文学もそうだし、作家の人も、書道家も、お花をやる人も、そういういわゆる文化人と言われる人たちを片っ端から招待する。それで、当時は三越シルバーハウスというところで……。

馬場　今、駒沢大の施設になっちゃったね。

箕田　結構広い芝生の庭があって。

馬場　桜を見る会のもう少し早かったやつか、桜のほうが早かったのかな、ちょっとわかりませんけれども。

箕田　そういうのを毎年1回やっていたんです。

馬場　ですから、私なんかはその真っただ中にいたわけですよ。招待状をつくって。

箕田　私が最後の担当をしていました。

馬場　担当したの。

箕田　私が最後です。私でちょうど予算がないから打ち切りになりました。

馬場　私に言わせれば、確かに相当お金も使って、結構経費もかかるわけですよね。だけれども、いろんな意味で世田谷区のよさが少しずつでも上がってくるというか、盛り上がってくるというか、それにはやっぱりどこかが仕掛けないといけない。だから、待ちの行政じゃなくて、どちらかというと、こちらから仕掛けをして、最初は小さいかもわからない。最初は、何だよ、また桜かよと言うかもわからないけれども、今すぐじゃなくてもいいと思うんですね。もうちょっとほとぼりが冷めてから。

箕田　区内大学の学長に参加していただいている学長懇談会とかが何となくその系統じゃないですか。

馬場　世田谷はよく見ると、ものすごく文教都市で、箱根の駅伝なんかを見ていると、軒並み何校かばっと出てきてみたいに、何か事あると、結構世田谷区の大学、こんなに大学があったのかよと、すごい文教都市なんですよ。さっき、うっかりしていたんです。文教都市をうまく利用して、学長を集めた。学長さんでいいのか、どこでいいのか、どのクラスでいいのか。まず、学長さんですよね。果たしてそれが体育系の大学とそうじゃないところが集まって、うまくいくのかどうかというのはあるけれども、結構うまくいくんですよね。面白いんですよ。

　だから、そこいらの地域性を考えると、ぜひ仕掛けというか、それでよく言うんですけれども、建物を新たなものを造ると、後の維持管理が大変だけれども、そういうソフト面だけなら、やってみて駄目なら、さっと撤退しちゃえばいいんですよ。それでおしまい。それは失敗じゃないんですよ。何か残っているんですよ。次にやったときに。だから、何もしないよりは、私が担当していたことを考えると、できれば何でもいいからやったほうがいい。やったことによって、必ず何かのアクション、リアクション、何か出てくる。だけれども、それには頭が、キャップがどう考えているかも非常に必要なところです。何かやろうとして、キャップが駄目だよと言われたら、ちょっとうまくいかないし、何だよ、あんなことをやってみたいなことでは、とにかく相当な政治家ですよね。そこをどう説得していくのか。

私のときの大場区長というのは、政治家ではありますけれども、そこまでいっていない政治家だった。今の新聞記事を見ていると、相当なことなんですけれども、そこいらをどう説得するか、それからどう考えているのか。よく言うリーダーシップ。頭の主導権なり、先導性によって職員がどんどん変わっていく、政策がどんどん変わっていくということはいっぱいあると思いますね。何かそこいらをぜひみなさんで考えて、進言して、どういう政策に結びつけるのか。こちらは実行部隊じゃないでしょうから、政策研究所ですから、しかも、よくよく見ると政策経営部ですから、経営というのは見返りの何かが少しでもないといけないのかなと。その見返りが何かというところは誰がどう判断するか。そこいらは非常に興味深いというか、今までにないところを、誰も今まではそういう評価をやったことがないんですよね。業績評価というのは。

私は1回だけ議会で言われたことがあるんです。自民党の議員に、あなたは区民まつりをやったり、いろんなことをやって、結構業績を上げているけれども、自分のやったことに対してどう思うという質問をされたんです。私のやったことは私自身では評価できませんと。この評価は後々の区民の人が評価してくれるものと思いますので、それは私としては評価できません。後々の人に委ねたいと思いますと答弁しちゃったんですけれども。それは、だって、よくやりました、自分ではそう思いますなんて言えないものね。その業績評価がもしできたら面白いなと。

やり方はいろんな手法があると思います。それはみなさんの頭で考えて、あるいはみんなの意見を聞く。極端なことを言えば、子どもの意見を聞く。それから、よくいろんなアンケート、行政についてどう思いますかと区民アンケートを取りますよね。あれは私はあまり好きじゃない。大体アンケートというのはいいことしか書いてこないのが普通ですよ。よくどんな施設がいいですか、テニスコート、何とかと、そればっかりですよ、出てくるのは。大体が施設面、こういうことをやってほしい、わかりやすいのはそんなものです。それが当たり前ですよね。何か文化行政的なものでこんなことをやってくださいなんて書いてくる人はほとんどいない。だから、あのアンケートというのは、私はあまり信用しないというか、自分の都合のいい、そのときの思いつきだけしか答えていないなと思っている。

古賀　今みたいなお話が本当に面白くて。

馬場　こんないいかげんなのはいないんじゃないですか。本当に好き勝手なことを言って。

箕田　その意味で、区民まつりは今も続いていて、馬事公苑が使えなくても若林公園でやっているぐらい続いているということは、評価としてはいいと。

馬場　そうでしょうね。それはね。だから、個々人の中に浸透して、区民の中に浸透しつつある。考えたら何十年とやっているんだよね。

大石　もう伝統のお祭りなのかなと。

馬場　私が辞めてからだって、相当たっている。その前からやっていたわけですからね。好き勝手なことを、いいのかしら、こんなことで。

古賀　ちょっと若い職員は、今の馬場さんのお話を伺って、決意表明を一言お願いします。

大石　決意表明は難しいです。

馬場　いいのよ、好き勝手言って。決意表明というのは、まともに聞いたって面白くないの。

大石　そうですね。すごい心に刺さりました。

馬場　区民まつり?

大石　区民まつりは何をイメージしてされたんですか。何にもないところからお祭りをやれと言われて。

古賀　しかも、ふるさとを感じるとか。

大石　何かイメージがあったりしたんですか。今だったら、ネットで調べればいくらでも参考になる。

馬場　誰でも参加できるということで、最初に頭の中で浮かんだのは盆踊りですよ。盆踊りというのは子ども、とにかく私もこんな小さいときから、それこそ物心ついた頃から盆踊りは近所でやっていました。盆踊りなら誰でも参加できるなと。まず盆踊りをやって、それから、さっき言ったお土産じゃないけれども、とにかく人間という

のは欲の勝った動物ですから、何か物が欲しいな、5円でも10円でも何か買えたらいいなと。

大石　わかります。何か買いたいなと。

馬場　そう。それを満たした。

大石　それは御自身で考えたんですか。何かお土産があったらいいなとか、誰でも参加できたらいいなとか。

馬場　そうです。それをまず自分の頭で考えた。

大石　自分の中で決めたんですか。

馬場　だって、相談したって誰も出てこないんだから。区長に聞いたって、いいよ、わからないよ、おまえの好きなようにやれ。これじゃ、どうにもならないでしょう。

大石　そこから自分で決めているんですね。

馬場　そうです。だから、そのときは自分で何でも、極論すると好き勝手にできたんですよ。プロデューサーなのか何なのか知りませんけれども、とにかく何でも自分でやった。逆に言うと、区の職員の中でも、割合と適性があったのかなと、そういう考えることとか何かが。誰にも相談しないで、とにかく。

大石　そうですよね。誰でもできることじゃないと思います。

古賀　4月に始まって、8月からやるというのは……。

田中　このスピード感がすごいですよね。

大石　私は与えられていたのかと思って、これがテーマとして。誰でも参加できて、お土産が出ていて、よかったと思えるというテーマがもらえて考えたんじゃなくて、そこから考えたということがすごいなと。とてもバックキャスティング的な考え方だなと思いました。

馬場　辞令をもらって、やれと言われて、区長は、これは馬事公苑の園長と約束したんだから、しかも8月の第1週だというんですよ。

田中　今もそうですね。

馬場　それは踏襲された。第1週の土日でやれと、それだけですよ。別に大変だとも思わないで、ああ、わかりましたと、それだけです。戻って、職員にやれと言われたから、わかった、俺の考えは、とにかく区民に参加してもらって、楽しかったと思って、お土産がついて買えればいいんだと、あとは気にしなくていいと。

その考えでやりたいから、その代わり、事務的なことというか、いろんな材料を買ったり、いろんなところへ頼んだりなんかするのは、俺は先頭に立っていくけれども、一緒にやろうよ、やってくれよと。それしかないんですものね。その間に多摩川で灯籠流しをやると言われて、まだ花火はやらないうちでしたけれども、7月に灯籠流しをやっているんですよ。どうやってやっていたのか知らないですけれども。でも、参ったとも思わないし、嫌だとも思わないし。

古賀　適性が。

馬場　適性があったのかなと。だから、ある面において区の職員の中の、大勢いる中で、見抜かれたわけでも何でもないと思いますが、たまたま自分の性に合っていた、何にもないところから物作りができるのが好きだったのかなと。それから、とにかく貪欲に、あっちこっち何でも見て歩くのが好きというか、何にでも興味を持っていたというか、そこいらはあったのかなと。

古賀　ゼロから一をつくるのは一番大変だと思うんです。あまり公務員の仕事にもないなと。

馬場　と思うけれども、逆にゼロから一をつくっていく、これほど楽しくて、好き勝手にできる仕事というのはないですよ。制約は全くないんですから。制約があるのはお金だけ。お金がなかったんです。

箕田　今はその制約が結構あるので、自由にやりにくい時代になっていますね。お酒も飲めないし。そこは大事だと思います。みなさん、必ずその話が出てくる。業務終了後にお酒を飲んで、その中で思いついた話とか。

馬場　うまくいったという。

箕田　今の若手の職員の人たちはその場はないので、やりづらい時代に公務員になっちゃったなと、役所に入っちゃったなと。

馬場　昔のことを言うと、怒られちゃうような話でいっぱいですよ。考えられない話がそれこそいっぱい。

古賀　区民まつりも私が応援職員だったときは

やっぱり打ち上げみたいなのをやっていたんですけれども、昔もされていたんですか。

馬場　区民まつりの打ち上げでひどいのになると、沖縄まで行っちゃったんですから。私なんかは出張で、区民まつりの打ち上げというわけではないですけれども、何で沖縄かというと、町の人がお神輿を造ったといって持ってきたんです。そうしたら、沖縄の宮古から、中学生の交流事業があったもので、中学生がこっちへ来て、逆に世田谷の中学生が宮古へ行っていた。そんなことで、宮古から議員さんが何人か区民まつりの見学があった。向こうは見学と言いながら、東京へ遊びに来るわけですよ。そこで、終わったあと、神輿を世田谷区に残しておいても、いわゆる神事、仏教は駄目でしょう。宗教的な儀式は。あれは宗教色彩はないと思いますけれども、でも、どこへあげようか。じゃ、宮古へあげよう。それで持っていく、大場代官さんの夫婦に行ってもらって、もちろん区が全部旅費を出して、私とミス世田谷もついていったかな。それはともかく、それで沖縄まで行けたんです。今じゃ多分行けないんじゃないかな、さすがに出張はね。

古賀　宮古は今もあれですよね。交流自治体で来ていますね。

馬場　宮古はね。これは一人のちょっと変わったというか、熱狂的な沖縄ファンの先生、校長先生はに困っていた。沖縄の話をすると、ぱっとすっ飛んでいっちゃうような先生がいた。余分な話。そんな話もあります。随分余分なことを言って申し訳ありません。

古賀　本当にまだまだ全然伺いたい話はたくさんあったんですけれども、お時間いただいて、ありがとうございました。